



TITLE:

前漢侯國考

AUTHOR(S):

布目, 潮風

---

CITATION:

布目, 潮風. 前漢侯國考. 東洋史研究 1955, 13(5): 377-394

ISSUE DATE:

1955-01-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/139019>

RIGHT:

# 前漢侯國考

## 布 目 潮 風

- 一 序 言
- 二 侯國の戸數
- 三 侯國の官制
- 四 結 語

### 一 序 言

「侯國」とは漢書卷十九上の百官公卿表に

縣大率方百里。其民稠則減。稀則曠。鄉亭亦如之。皆秦制也。列侯所食縣曰國。皇太后皇后公主所食曰邑。

有蠻夷曰道。凡縣道國邑。千五百八十七。

とある如く、列侯の食む所の縣をいうのである。個々の侯國については漢書地理志に夫々の縣の下に「侯國」と原注があり、錢大昕によればこれは成帝の元延末現在のものである。その列侯とは言ふ迄もなく、漢代二十級の爵制中の最高のもので、本來「徹侯」というべきだが、武帝の諱を

避けて「通侯」、或は「列侯」というとある。<sup>2)</sup>

この列侯の一級下の「關内侯」、また二十級以外であるが、その上に位し一種の爵制と考えられる「諸侯王」<sup>3)</sup>については、列侯との關係においても述べなければならない點もあるが、これらについては別の機會に譲ることとし、ここでは觸れない。但し近頃「侯王」なる語が用いられるがこれは諸侯王を指すのか、諸侯王と列侯も含めて指すのか不分明で、制度を論ずる場合には適當な語でない。また「郡國」という場合の國は、諸侯王の「王國」の國で、侯國とは別個のものである。そのことは、漢書地理志の郡國の記載を見れば明らかであり、侯國は必ず郡の下に屬縣にある。しかし廣平信都の二王國に例外があるが、この解釋は錢大昕の鋭利な解釋につぎと思う。

列侯には漢書の表の分類に従えば、王子侯、功臣侯、外戚恩澤侯の三種類となる。そのうち王子侯は、いわゆる

「推恩の令」により、王國より分割されて出来た列侯である。<sup>65)</sup>しかしその分割されて侯國となった土地は、王國より離れて郡に所屬することとなるのである。これは別の言葉でいえば、推恩の令の施行に伴い、漢の郡縣化が促進せられたことで、この點については最近に北海道大學の藤岡喜久雄氏の研究がある。<sup>66)</sup>功臣侯は武功により列侯に封ぜられたものであり、外戚恩澤侯は外戚及び特別の恩惠により列侯となったもので、武帝の時まで丞相は列侯より任ぜられたが、公孫弘を武帝が丞相に任じた所、列侯でなかった中で、彼を列侯として以來、丞相になれば、必ず列侯の爵と與えられ外戚恩澤侯に屬することとなった。<sup>67)</sup>侯國の數については、各時代のもは明らかでないが、漢書の卷二十八下の地理志に、

凡郡國一百三。縣邑千三百一十四。道三十二。侯國二百四十一。

とあり、これは前漢平帝(A.D. 1~5)の時のことである。

しかしこの數については周壽昌の漢書注校補の卷二十六に、壽昌案百官公卿表云。凡縣道國邑千五百八十七。綜此計之。適符其數。而以每郡國所領縣計之。止有一千五

百七十八。本注侯國一百九十三。尙有四十八未注。則皆傳寫脫漏之失也。

とある如く、現在の漢書の地理志の縣の下の原注に、侯國と記されたものが一百九十三ある。それを補ったのが錢大昕の二十二史攷異卷九の侯國攷で、それによれば、

志稱侯國二百四十一。今數之止百九十有四。予證以諸表。各標其始封姓名。又補志之失注者二十五人。後之讀班史者庶有取焉。

とあり、錢大昕の見た漢書には侯國と注せられるもの一百九十四で、一多く、更に漏れたもの二十五人を補っている。漢書地理志の侯國二百四十一は決してたらしい数字ではなからうし、現在一百九十三しかないのは注記の疎漏と思われる。侯國の數は武帝の元鼎五年(B.C. 112)に「酎金の律」により一舉に百餘人の列侯が免ぜられ、以後減少した。しかし平帝の時でなお二百四十一で、漢全體の縣の約八分之一に當り、侯國は漢帝國の政治を考えるには、無視出来ないものがある。

さらに侯國の内部に眼を向けると、侯國はすべて縣であり、また一方に漢代の列侯の食邑は戸數で表現されている。

列侯のなかの功臣侯、外戚恩澤侯は漢書の表中にその大部分の戸數が示されている。但し王子侯には戸數の示されているものが少く、他の二者と比較して異り、少々問題を残しているようであるが、私には今はっきりその區別を述べることが出来ない。しかし結局において王子侯も戸數で示されていたことは、史記の平準書の耐金の條の集解に引く漢儀注に、

王子爲侯。侯歲以戸口耐黃金於漢廟。

とあるにより明らかである。なお功臣侯、外戚恩澤侯で戸數が明瞭に表示されているものでも、表と列傳の間に若干の差違がある。これについては宇都宮教授も指摘された如く、<sup>2)</sup>列傳の方がおおむね概數で、表の方が端數までついで正しく、且つこの端數のついでにすることが、列侯を封ずる場合に、初めに地域が決定され、そこに含まれている戸數をあげてその食邑としたことを示しているとされたのは卓見であろう。しかし以上の理由のほかに、列侯の食邑が戸數で表示されていても地域であることは、列侯の食邑の戸數が、年と共に増大している例があるによっても證明出来る。このことは既に牧野博士も指摘せられた所である

が、稍異なる點もあるので以下にその表を掲げてみる。

侯 號 姓 名	始封時 戸數	免時戸數	免 時	繼續 年數	倍率
平陽懿侯 曹 參	10,000 (高祖六)	20,000 (B.C. 101)	征和二 (B.C. 1)	110年	二・一
曲逆獻侯 陳 平	5,000	10,000	元光五 (B.C. 106)	69年	三・三
鄼文終侯 蕭 何	20,000	20,000	約四六		二・0
曲周景侯 鄼 商	40,000	100,000 (B.C. 140)	景帝中二 (B.C. 140)	55年	三・七
成敬侯 董 澤	20,000	30,000 (B.C. 151)	景六 (B.C. 151)	50年	二・0
陽都敬侯 丁 復	70,000	140,000 (B.C. 152)	景二 (B.C. 152)	46年	二・二
東武貞侯 郭 蒙	30,000	101,000 (B.C. 152)	景六 (B.C. 152)	50年	三・四
南安嚴侯 宣 虎	20,000	22,000 (B.C. 154)	景中元 (B.C. 154)	55年	二・三
曲成園侯 蟲 達	40,000	20,000 (B.C. 162)	文後二 (B.C. 162)	40年	二・三
魏其嚴侯 周 止	10,000	30,000 (B.C. 165)	景三 (B.C. 165)	48年	三・0
平悼侯 工師喜	10,000	30,000 (B.C. 165)	景中五 (B.C. 165)	57年	二・五
高宛制侯 丙 猜	10,000	30,000 (B.C. 165)	建元二 (B.C. 165)	64年	二・0
宜曲齊侯 丁 義	67,000	110,000 (B.C. 165)	景四 (B.C. 165)	49年	一・六
終陵齊侯 華母害	70,000	110,000 (B.C. 165)	景四 (B.C. 165)	49年	二・0

樂成節侯 丁禮	1000	高祖六 (B.C. 101)	2400	元鼎五 (B.C. 117)	90	2・4
杜衍嚴侯 王素	1700	高祖七 (B.C. 100)	3500	建元六 (B.C. 110)	67	2・0
朝陽齊侯 華寄	1000	〃	3000	元朔三 (B.C. 113)	75	5・0
邱嚴侯 黃極忠	1000	高祖二 (B.C. 195)	4000	元鼎元 (B.C. 116)	66	4・0

以上いづれも漢書卷十六高惠高后文功臣表によつたものである。なお減少したものに次の二例がある。

柳丘齊侯、或賜	1000	高祖六 (B.C. 101)	3000	景後元 (B.C. 114)	59	0・3
昌武靖信侯單究	900	〃	2000	元朔三 (B.C. 113)	76	0・6

但し戎賜の場合は史記では始封が千戸となつてゐる。この二例は誤か、或は何かのことがあつて削去されたものではないかと思われ、例外的なものであらう。

また年と共に列侯の封邑の戸數が自然増加を遂げたことは漢書卷十六の高惠高后文功臣表の序において、

漢興。……八載而天下廼平。始論功而定封。訖十二年。

侯者百四十有三人。時大城名都。民人散亡。戸口可得而數。裁什二三。師古曰。裁與緣同。十分之內。纔有二三也。是以大侯不過萬

家。小者五六百戸。……

故逮文景四五世間。流民既歸。戸口亦息。列侯大者至三四萬戸。小國自倍。師古曰。自倍者謂舊五百戸。今者至千也。曹參初封萬六百戸。至後嗣侯宗免時。有戸二萬三千。是爲戸口蕃息故也。它皆類此。

とあり、漢初より文帝、景帝の頃に至つて、逃亡してゐた流民が歸り來り、戸口が増加し、それに伴つて列侯の封邑の戸數が小國でも二倍となつたことは極めて明瞭である。

またこのことによつて、列侯の食邑が戸數であるが、一定の土地の廣さを指していることも明かとなつたであらう。

以上で列侯の種類、その食邑である侯國の數、侯國は戸數で表現されているが、實は土地の廣さであることなどを述べたが、かゝる侯國の構造の具體的な姿は漢書卷八十一の匡衡傳が最もよく示している。11)この匡衡傳については古くは錢大昕。12)我が國でも、牧野巽博士、13)吉田虎雄氏、14)五井直弘氏、最近では宇都宮教授などが觸れられている。この中で、匡衡の食邑の戸數は、六百戸とあるが、漢書卷十八の外戚恩澤侯表によれば、

樂安侯匡衡。以丞相侯。六百四十七戸。

とあり、これがいわゆる端數のついた正確な戸數である。この六百四十七戸が傳によれば三千一百頃の廣さである。

しかしその土地の境界に問題があつて争が起る。その中にまた種々の下級官吏が登場して興味深い。また境界の改訂による列侯の収入には田の租穀のみ問題となつてゐることも注目される。その他細部にわたる點より、實に匡衡傳の研究は、漢代列侯研究そのものであると言つても過言でない。匡衡傳は漢代列侯研究完成の曉に初めて解明される。私も以下の列侯研究は要約すれば匡衡傳の研究である。しかしここでは先づ第一に列侯食邑の戸數より問題としたい。換言すれば、先づ列侯食邑の戸數の一般的な形を追求してみようと思う。

## 二 侯國の戸數

史記の功臣侯表、さらに漢書の功臣侯表、及び外戚恩澤侯表や、それらの列傳により、列侯の食邑の戸數を考える

表(1) 前漢功臣侯始封平均戸數表

皇 帝	列 侯 數	始封平均戸數
高 祖 帝	110	266
惠 帝	3	233

表(2) 前漢外戚恩澤侯始封平均戸數表

平 均	元 帝	宣 帝	昭 帝	武 帝	景 帝	文 帝	高 后
	帝	帝	帝	帝	帝	帝	后
	六	九	八	五	一	六	四
	1011	1800	1395	1842	1831	191	575
	1463						

平 均	哀 帝	成 帝	元 帝	宣 帝	昭 帝	武 帝	皇 帝
	帝	帝	帝	帝	帝	帝	帝
	二	一	九	二	六	九	
	1845	1197	307	1840	3383	526	
	2763						

さらに(1)の表中にて、最も列侯數の多い高祖功臣侯と武帝功臣侯についてその戸數の分布を示すと、表(3)(4)の如くなる。



楚國 彭城縣 戸四萬一百九十六

以上いずれも數萬の多きにのぼっているが、これが一般の縣の戸數とは到底考えられず、これらは特に戸數多きものを記載したのであらう。

普通の縣は先に一萬戸程度と考えたが、實際に漢書の地理志に記載された各郡の戸數をその縣數で割り、各郡の平均を算出し、それを基として天下の郡の縣の平均戸數を算出すれば「七四七五戸」<sup>17)</sup>となり、先に述べた數萬戸の縣は一般的なものと考え難いことは明らかである。

以上により侯國である縣の戸數をはっきり示す資料はないが、一般の縣の戸數について言えば、數千戸、或は七八千戸程度の戸數を有したとしても大して無理ではなからう。

そこで縣の平均戸數と、先に述べた列侯の食邑の戸數が二三千戸程度であったのと較べると、その差が相當あるのに氣がつく。しかも前漢では列侯は實在の縣に封ぜられていたのである。この間の戸數の差違をいかに考えたらよいか。

それを解く鍵の一つが史記卷五十六の陳丞相世家である。

高帝南過曲逆。<sup>18)</sup>……顧問御史曰。曲逆戸口幾何。對曰。

始秦時三萬餘戸。間者兵數起。多亡匿。今見五千戸。

於是乃詔御史。更以陳平爲曲逆侯。盡食之。除前所食

戸闕。

とあり、同じ記事は漢書卷四十の陳平傳にも見え、また史記卷十八の高祖功臣侯年表には

曲逆。以故楚都尉。漢王二年初從修武爲都尉。遷爲護

軍中尉。出六奇計。定天下。侯五千戸。高祖六年十二

月甲申。獻公陳平元年。

とあり、曲逆全體の戸數である五千戸に封ぜられたことは確かである。そこで陳丞相世家の「盡食之」の意味は、曲逆縣の全戸數を陳平に食ましめてその封邑としたことである。しかるに他の列侯については「盡食之」ことは見えず、これは陳平のみの特例で、これより考えると、他の列侯は縣のすべての戸數を食んでいたのではないと考えられる。このことについては既に錢大昕が二十二史攷異卷八において、

漢時封縣侯。戸數多少不同。如蕭何始封鄴。食八千戸。

後又益封二千戸。元狩中以鄼戸二千四百。封其曾孫慶。



宣帝時以鄼戸二千。封其玄孫建世。封號雖同。而租入  
 迥別。蓋一縣之戸。不止此數。除侯所食外。其餘歸之  
 有司也。高祖功臣盡食一縣者。惟平一人。

と述べている。錢大昕の議論は、蕭何が鄼に封ぜられ、始  
 め八千戸で後二千戸益封され、その後免ぜられた。さらに  
 元狩中に何の曾孫の慶が鄼の二千四百戸に封ぜられており  
 それも免ぜられたが、また宣帝の時に何の玄孫の建世が鄼  
 の二千戸に封ぜられた。このように同じ鄼侯であっても、

時により戸數が増減しているから、收入も異なる。これは一  
 縣の戸數が鄼侯の食邑となった戸のみでないことを示し、  
 列侯の食邑となった以外のその縣の租は縣官の收入となっ  
 たのであり、高祖功臣で一縣全體を食んでいるものは陳平  
 一人であるというので、鄼侯が同じ鄼侯でも益封されたり、  
 また遙かに少い戸數に封ぜられる所より、縣全體を食んで  
 いないとし、陳平だけは例外で、縣全體を食んでいたとい  
 うのである。これは甚だ卓見と言わねばならない。

蕭何以外にも「益封」の例はあり、益封は列侯が縣のす  
 べての戸數を食んでいない場合に、その縣内にて可能であ  
 る。益封の普通の場合は他縣にわたったことは見えないか

ら列侯が縣全體の戸を食んでいないと考える場合にのみ、  
 縣内益封が可能である。故に益封が行われたことは、一面  
 から言えば、縣全體を列侯が原則として食んでいない證據  
 とすることができると考えられる<sup>19)</sup>。

さらに縣の戸數と、列侯の食邑の戸數とは同一でないと  
 考える史料としては、續漢書百官志の列侯の條に、

每國置相一人。其秩各如本縣。本注曰。主治民。如令  
 長。不臣也。但納租于侯。以戸數爲限。

とあり、侯國の相が租を列侯に納める時に、「戸數を以て  
 限りと爲した。」とあるのは、侯國即ち縣のすべての租を  
 列侯が食まず、縣の戸の租のうち、列侯の食邑の戸の分の  
 租のみ列侯に納めたという意味で、これも縣の戸數と、列  
 侯の食邑の戸數とを異なるものと考えることによってのみ、  
 この「以戸數爲限」の句が生きてくるのである。

以上論證し來った所により、縣の含む戸數と、列侯の封  
 邑の戸數とは普通の場合は別なものであることは明らかと  
 なったであらう。

次に私が前漢の列侯の食邑をかく考える根據として、漢  
 以後の食邑の實態がある。

西晋では、吉田虎雄氏によれば、初學記卷二十七寶器部絹等九に引く晋故事に次の文がある。

晋故事。凡民丁課田夫五十畝。收租四斛。絹三疋。綿三斤。凡屬諸侯。皆減租穀畝一斗。計所減以增諸侯絹戸一疋。以其絹爲諸侯秩。又分民租戸二斛。以爲(諸)侯奉。其餘租及舊調絹二戸三疋。綿三斤。書爲公賦。九品相通。皆輸入於官。自如舊制。

これによれば、諸侯の封國における課田の田租は一畝につき一升(斗は升の誤)を減じ、その代りにその家の戸調の絹一疋を増徴し、それを諸侯の俸祿に充て、なお諸侯の封國における課田の田租の全収入額より一戸當り二斛、即ち萬戸の國なら二萬斛を分けてこれまた諸侯の俸祿に充てたとあり、諸侯に屬するものでもすべてが諸侯の収入となつたわけではなく、諸侯に屬するもののうちの幾分かが實際の諸侯の収入となつたのみなのである。

また唐では仁井田博士によれば、通典卷三十一の職官の歷代王侯封爵唐制の條に、

凡諸王及公主以下所食封邑。皆以課戸充。州縣與國官邑官。共執文帳。准其戸數。收其租調。均爲三分。其

一。入官。其二。入國。公所食邑則全給焉。

とあるを引用されて、これは開元四年三月の制であるが、公を除き、諸王及び公主以下の封邑は、その三分之一が官に入り、三分之二が諸王等の収入となつたとあり、これも封邑の租調のすべてが諸王等の収入とはなっていないのである。

このように西晋でも、唐でも、いずれも食邑の戸のすべての租が諸侯、諸王等の収入ではなかつたのである。故に漢代でも食邑の戸のすべての租を列侯が食んでいなかったと疑う必要があるわけである。かく考えてくると前漢の列侯はどうなるであろうか。

前に述べた漢書の匡衡傳が列侯が租をいかに收受したかの實例であるが、匡衡の場合は樂安郷の六百四十七戸のすべての租を食んでいたことに疑をはさむ餘地はないようである。しかし私が先に述べた陳平の場合は例外的に縣全體の戸を食み、その他は錢大昕の指摘した鄭侯の場合などに明らかになく縣のすべての戸を食んでおらず、こういう型がむしろ前漢の一般的な侯國の状態であることを論證した。しかしながらそれにも拘らず前漢の列侯が縣に封ぜられた

こと、これまた疑う餘地はないのである。この二者をいかに調和して解したらよいか。それに對し次の如く考えたい。

漢代では列侯が縣に封ぜられたことは事實であるが、それはむしろ形式的擬制的に封ぜられたものではあるまいか。

そして實際の収入は、その縣の中の特定の食邑の戸より出る。故に縣に封ぜられることは別に食邑を戸で示す必要があったのである。その食邑の戸は普通の場合は縣全體の戸の何分の一かであったのである。

それならばまた匡衡の場合の如く、樂安郷の全部の戸に封ぜられた場合はどう考えたらよいかの疑問が浮ぶ。前漢では縣侯、郷侯また亭侯などの名稱はなく、列侯はすべて縣侯である。匡衡の如く、郷に封ぜられた場合は、他にも例はあるが、郷がその場合は昇格して縣扱いとなるのである。郷侯、亭侯は後漢になって始めてその名稱が現れるが、實質的な郷侯は、匡衡傳の如く、既に前漢より發生しているのである。このような郷に封ぜられる場合が、前漢ではどの位あったか。その全貌は今の所では明らかにし得ないが、漢末、殊に漢書地理志の縣に侯國と原注されているものを調べてみると、すべての郡の中で侯國の最も多い琅邪

郡では、縣五十一のうち、侯國が三十一あり、その侯國である縣は、王先謙の補注によれば、後漢ではすべて省かれて存していない。侯國は錢大昕によれば成帝の元延末（B.C. 9）で記載されている。すると成帝の末に存した侯國の縣は、後漢ではすべて縣たるの實がなく、省かれたわけである。これには種々の事情もあらうが、中には郷、或は亭に列侯が封ぜられ、その爲に縣に昇格していたのが、侯國でなくなると同時にその郷か亭に轉落した爲に、後漢には省かれたものもあったと考えられる。故に前漢末では匡衡の如く、郷に封ぜられ、しかもそのすべての戸を食んだものが相當存したであらう。しかし私には匡衡の例の如きものが漢初より圧倒的に多かつたとは到底考えられない。先に論證した一應は縣全体を食むが、實質的には縣の中の何分の一かの特定の戸の租のみ食んだ形が一般的であり、匡衡の如き例は前漢末に漸く増大してきたむしろ特例に屬する型と考えるのである。

### 三 侯國の官制

普通の縣には萬戸以上には「令」、萬戸以下には「長」が

おかれて、その縣を統治するが、侯國である縣には、令長に代り、「相」がおかれる。漢書の百官公卿表の上の爵の條に、

二十徹侯。皆秦制。以賞功勞。徹侯金印紫綬。<sup>24)</sup> 避武帝諱曰通侯。或曰列侯。改所食國令長名相。

とある。續漢書百官志の列侯の條には、

每國置相一人。其秩各如本縣。本注曰。主治民。如令長。不臣也。但納租于侯。以戶數爲限。

とあり、後漢も前漢と大して變更はないと思われるから、續漢書を參考にして考えると、「相」はその秩はもとの縣の令長の通りで、職掌も全然變つたことがない。但し「不臣也。」というのは、後に述べる家丞、庶子が家臣であるのに較べていうので、相は名稱は侯國の相であっても、列侯の臣下の列には入らないのである。この點は極めて重要である。列侯の力の及ぶ範圍は、特定の食邑の戸と、家丞、庶子以下の官のみで、相はこれらと別に存在して、普通の令長の如く、侯國を統治していたのである。これは私が先に述べた侯國である縣と、列侯の食邑の戸とを別なものととして考えると、この意味の相の職掌は極めて鮮かに浮び上

ってくるのであつて、縣即列侯の食邑と考えると、次に述べる家丞庶子と相の關係が極めて不分明となつてくるのである。そしてその相の任務に「但納租于侯。以戶數爲限。」があり、この意味は先に述べた如くである。

次に家丞、門大夫、庶子について述べる。これも先に掲げた漢書百官公卿表上の徹侯の條の後に、

或曰列侯。改所食國令長名相。又有家丞・門大夫・庶子。

とあり、これだけでは何のことかわからない。續漢書では先の「以戶數爲限。」に續けて次の如く述べている。

其家臣置家丞庶子各一人。本注曰。主侍侯。使理家事。列侯舊有行人洗馬門大夫。凡五官。中興以來。食邑千戸已上。置家丞庶子各一人。不滿千戸。不置家丞。又悉省行人洗馬門大夫。

列侯の家臣として家丞、庶子、門大夫、行人、洗馬と五官があるが、そのうち門大夫・行人・洗馬については何もわからず、いづれも後漢には省かれている。家丞、庶子は列侯に侍して家事を理めたことがわかる。しかも家丞は後漢では千戸以下の列侯には置かれていない。前漢ではそう

でなかったことは、六百四十七戸の匡衡に家丞が存していることにより明らかである。

家丞は恐らく列侯が就國しているにないに拘らずその封邑にいて、家事萬般を司っていたらしく、比較的よく現われる。その秩は後漢書卷七十三の朱暉の傳の注に引かれた續漢志に「家丞秩三百石。」とあり、その秩が後漢では三百石であった。

漢書卷十八の外戚恩澤侯表の周子南君姬嘉の條に、

始元四年。君當嗣。十六年。地節三年。坐使奴殺家丞。

棄市。

とあり、また同じく卷十五下の王子侯表の陵鄉侯訢の條に、

建昭元年正月封。建始二年。坐使人傷家丞。又貸穀息

過律。免。

とあり、この二例は列侯と家丞と合わず、奴、或は人をして家丞を殺傷せしめている。

同じく卷十七の景武昭宣元成功臣表の轅陽侯江喜の條に、

永光四年。坐使家丞上書。還印符隨方士。免。

とあり、また同じく卷十五下の王子侯表の昌鄉侯憲の條に、

元壽二年。坐使家丞封上印綬。免。

とあり、また匡衡傳には、

殷曰。賜以爲舉計。令郡實之。恐郡不肯從實。可令家丞上書。

とあり、また漢書卷七十三章玄成傳の章賢の條に、

使家丞上書言大行。

とあり、書類を上へ進達することなどは列侯がすべて自分でしなくて、家丞の任務であったことがわかる。

庶子についてはあまり史料がないが、漢書の王子侯表の下の陽興侯昌の條に、

建始二年。坐朝私留他縣。使庶子殺人。棄市。千三百

五十戸。

とあるのみである。

なお以上述べたほかに「家吏」と言われるものがあるようである。王子侯表上の葛魁節侯寬の條に、

元鼎三年。坐縛家吏。恐猾受賕。棄市。

とあり、また史記の一百十一の衛將軍驃騎列傳によれば、

大將軍衛青平陽人也。其父鄭季爲吏。給事平陽侯家。

與侯妾衛媼通。

とあり、平陽侯は曹參が封ぜられた列侯であり、衛青の父

は吏で平陽侯家に事えてゐる。前の家吏などと同じもので、家丞、庶子のほかにもかゝる「家吏」が存したようである。以上述べた、相、家丞、庶子が侯國の官制の主なものであるが、相についてはなお少々問題がある。相に關する官制は上に述べた如くであるが、これは唯、令長と名が異なるのみで實は變らない。そこで正式には侯國の相と言ふべきでも、實際には令長で通用してゐたのではないかと思われる。このことは錢大昭の「後漢郡國令長攷」に、當然に「侯相」であるべきものが、令長となつてゐる多くの例をあげてゐるにより、後漢では明瞭であるが、これも前漢にさかのぼつて考へてよいであらう。また匡衡傳の中に種々の郡の下級官吏が現われるが、「相」は現われない。これは偶然現われないのかもしれないが、憶測を加えるならば、匡衡の樂安郷の如く、郷に封ぜられた場合は、相はおらず、樂安郷の場合は、それが侯國となつた後も、僅の令長の管轄下にあつたのではないかと推測してゐる。

#### 四 結 語

既に述べ來つた所要約すれば、先づ前漢の列侯の封邑

の戸數は大體二千戸程度であるが、その列侯の封ぜられた縣（侯國）は平均八千戸程度で、その間に相當の差違のあることを指摘した。そしてこれは侯國の戸數が元來少いではなくて、縣に封ぜられても、その縣のすべての戸數を食んでいなかったとし、その論據として史記の陳丞相世家の「盡食之」の解釋や、また「益封」の解釋、及び續漢書百官志の「以戸數爲限」の解釋などをあげた。そしてまた西晉、唐などの食邑の性格の關連においても、漢では原則として縣のすべての戸數を食んでいない方が理解し易いことを述べた。但し著名な匡衡傳は、これと異り、前漢末に漸く發生してきた郷のすべての戸數を食ましめられる特殊の型ではないかと考へた。次に侯國の官制を考え、「相」、「家丞」、「庶子」がその主なものであるが、相と家丞の關係も、前述の如く、列侯が縣のすべての戸數を食んでいないとする方が、理解し易く、相は單に名目のみで、實質は令長とかわりがない。家丞が眞に列侯の家のことを司る執事長の如きものであつたとした。

以上の論は未熟にして一試論たるを免れない。しかし從來の侯國に關する論は、必ずしも私の疑問としてゐるこ

とに解決を与えないで、列侯の分布が論ぜられたり、<sup>27)</sup>或は匡衡傳が直ちに侯國の典型であると論ぜられたりしている。この稿においては列侯の問題のうち、その食邑の戸數の問題と、侯國の官制の問題とに觸れたのみである。列侯については、この他その食邑の戸より上る収入は何であるか。またその公的收入以外の私的な収入の問題など重要な點が残っているが、これは他日に譲りたい。

なおこの侯國の性格は、漢代の封建制を論ずる一重要な資料であろうが、この點については、私の考え來った所によれば、列侯はただ普通の縣の中の特定の戸の租を縣官より給せられるのみであり、また侯國の相は名稱は相でも實質は令長と變らず、單に擬制的に侯國の相であるに過ぎず、その爲に相というべきものも令長と呼ばれていた場合があった位で、いずれにしても封建制は稀薄なもののようにである。唯殘されている點は、その私的生活における列侯の權力を背景にした誅求である。公的な生活においては諸侯王も漢初より強い制限が與えられていることは拙稿にて既に述べた所であるが、<sup>28)</sup>この點は列侯の場合も、更に強い中央集權的な力の加えられたものと思われ、特に列侯について

は封建制の問題として取上げられる餘地は僅かしかないと考えるが、今後の研究に待つべき點も多い。

本稿の大部分は昭和二十九年十一月三日東洋史談話會大會にて「前漢の侯國について」と題して報告したものであるが、報告後に森鹿三教授その他の方々の御示教により一部修正を加えた。御示教の部分は一々斷っていないが、御好意に深甚の謝意を表する次第である。なお本研究は文部省科學研究費による漢代史綜合研究と關連ある研究であることを附記しておく。(昭二九、一一、一五)

# 〔注〕

①注④参照。

②漢書百官公卿表上に「爵。一級曰公士。二上造。……十八大庶長。十九關內侯。二十徹侯。皆秦制。以賞功勞。徹侯金印紫綬。避武帝諱曰通侯。或曰列侯。」とあり、前漢の爵制については鎌田重雄氏の「西漢の爵制」(漢代史研究所收)参照。

③諸侯王も爵の一種と考えてよいことは、史記卷十七漢興以來諸侯年表序に「漢興序二等。」とあり、その集解に韋昭を引いて「漢封功臣。大者王。小者侯也。」とあり、漢初には二十級の爵制以外に王、侯二等之爵という考も存したようである。また漢書卷九十七外戚傳に、「昭儀位視丞相。爵比諸侯王。健行視上卿。比列侯。」とあるにより明らかである。

④二十二史攷異卷九侯國攷、「問。侯國例不屬諸侯王。故王子而侯

者。必別屬漢郡。廣平信都亦諸侯王國也。而得有侯國何故。曰。班志郡國之名。以元始二年戶口籍爲斷。其侯國之名。則以成帝元延之末爲斷。元延之世。廣平信都皆郡也。非國也。國已除爲郡。則從前改屬他郡者。復返其舊。迨哀帝建平中。復置此二國。則侯國必仍改屬他郡。特史家不能一一載之爾。試觀廣平領縣十六。而戶止二萬七千有奇。信都領縣十七。而戶止六萬五千有奇。以附近郡國準之不應。縣多而戶少乃爾。蓋改郡爲國之後。未必仍領若干縣也。」

⑤蔡邕の獨斷には「徹侯。羣臣異姓有功封者。稱曰徹侯。避武帝諱。改曰通侯。或曰列侯也。」とあり、王子侯は列侯でないかの如くであるが、續漢書百官志列侯の條には、「武帝元朔二年令。諸王得推恩分衆子土。國家爲封亦爲列侯。」とあり、王子侯が列侯であることは明らかである。

⑥北大史學第二號、推恩の令。

⑦漢書卷五十八公孫弘傳に「元朔中。代薛澤爲丞相。先是漢帝以列侯爲丞相。唯弘無爵。上於是下詔曰。……其以高成之平津鄉戶六百五十。封丞相弘爲平津侯。其後以爲故事。至丞相封。自弘始也。」とあり、また漢書卷八十三朱博の傳に「以博代光爲丞相。封陽鄉侯食邑二千戶。博上書讓曰。故事封丞相不滿千戶。而獨臣過制。誠慙懼。願還千戶。上許焉。」とあり、丞相で列侯に封せられた時は千戸に満たないのが故事であった。

⑧漢書卷六武帝紀、元鼎五年九月、「列侯坐獻黃金酎祭宗廟不如法。奪爵者百六人。」

⑨名古屋大學文學部研究論集Ⅷ號、劉秀と南陽參照（一九五四

年五月）

⑩牧野巽博士、西漢の封建相續法、第一部、三五八頁（支那家族研究、昭和十九年刊所收）

⑪漢書卷八十一匡衡傳。「建昭三年。代韋玄成爲丞相。封樂安侯。食邑六百戶。……初衡封僮之樂安鄉。鄉本田隄封三千一百頃。南以閭佰爲界。初元元年。郡圖誤以閭佰爲平陵佰。積十餘歲。衡封。臨淮郡遂封眞平陵佰以爲界。多四百頃。至建始元年。郡廼定國界。上計簿。更定圖。言丞相府。衡謂所親吏趙殷曰。主簿陵賜。故居奏曹。習事曉知國界。署集曹掾。明年治計時。衡問殷國界事。曹欲奈何。殷曰。賜以爲舉計。令郡實之。恐郡不肯從實。可令家丞上書。衡曰。顧當得不耳。何至上書。亦不告曹使舉也。聽曹爲之。後賜與屬明。舉計曰。案故圖。樂安鄉南以平陵佰爲界。不從故。而以閭佰爲界。解何。郡即復以四百頃付樂安國。衡遣從史之僮。收取所還田租穀千餘石。入衡家。……以上が匡衡傳の主な部分であるが、テキストの問題として一言したきは「不從故。而以閭佰爲界。」の「從」は今本では「不足故」となっており、既に顏師古の見た本のそうであったことは注に「師古曰。不足故者不依故圖而滿足也。」とあるが、「燉煌石室碎金」に見える燉煌本の漢書匡衡傳には、「不從故」とあり、この方が意味がはっきりし、師古の如き注を加える必要はない。

⑫二十二史攷異卷八匡衡傳の項

⑬前掲書、第一部註、三五九頁

⑭兩漢租稅の研究、第十一節、戶賦と租銖、一七一頁、昭和十七



年。

⑮ 中國古代帝國の一性格—前漢における封建諸侯について（歴史學研究、第一四五號）三四頁、但しそこでは「從史」を「從吏」に誤っている。

⑯ 前掲書、四十七頁至五十一頁。

⑰ 參考までに漢書地理志による各郡及び王國の戶數、縣數、侯國數、一縣平均戶數を表にして掲れば次の如くなる。

郡國名	戶數	縣數	侯國數	一縣平均戶數
京兆尹	1,250,101	22	0	1,250,000
左馮翊	1,150,101	22	0	9,772
右扶風	1,120,000	22	0	10,000
弘農郡	1,180,000	22	0	10,000
河東郡	1,180,000	22	0	9,811
太原郡	1,180,000	22	0	8,000
上黨郡	750,000	22	0	5,000
河內郡	1,180,000	22	0	1,180,000
河南郡	1,180,000	22	0	1,180,000
東留郡	1,180,000	22	0	1,180,000
陳留郡	1,180,000	22	0	1,180,000
潁川郡	1,180,000	22	0	1,180,000
汝南郡	1,180,000	22	0	1,180,000
南陽郡	1,180,000	22	0	1,180,000
江夏郡	1,180,000	22	0	1,180,000

豫章郡	1,180,000	22	0	1,180,000
丹陽郡	1,180,000	22	0	1,180,000
會稽郡	1,180,000	22	0	1,180,000
臨淮郡	1,180,000	22	0	1,180,000
東海郡	1,180,000	22	0	1,180,000
琅邪郡	1,180,000	22	0	1,180,000
東萊郡	1,180,000	22	0	1,180,000
北海郡	1,180,000	22	0	1,180,000
齊郡	1,180,000	22	0	1,180,000
泰山郡	1,180,000	22	0	1,180,000
濟南郡	1,180,000	22	0	1,180,000
千乘郡	1,180,000	22	0	1,180,000
平原郡	1,180,000	22	0	1,180,000
勃海郡	1,180,000	22	0	1,180,000
涿郡	1,180,000	22	0	1,180,000
清河郡	1,180,000	22	0	1,180,000
常山郡	1,180,000	22	0	1,180,000
鉅鹿郡	1,180,000	22	0	1,180,000
魏郡	1,180,000	22	0	1,180,000
沛郡	1,180,000	22	0	1,180,000
濟陰郡	1,180,000	22	0	1,180,000
山陽郡	1,180,000	22	0	1,180,000
九江郡	1,180,000	22	0	1,180,000
廬江郡	1,180,000	22	0	1,180,000

朔方郡	西河郡	上郡	北地郡	安定郡	敦煌郡	酒泉郡	張掖郡	武威郡	天水郡	金城郡	隴西郡	武都郡	巴郡	牂柯郡	益州郡	越嶲郡	犍爲郡	蜀郡	廣漢郡	漢中郡	零陵郡	武陵郡	桂陽郡
三三・三三八	一六・三九〇	一〇三・六八三	六四・四六二	四三・七三三	一一・一〇〇	一八・一四七	二四・三三二	一七・五八一	六〇・三七〇	八八・四七〇	五三・九四四	五一・三七六	一五八・六四三	二四・二九	八一・九四六	六一・二〇八	一〇九・四一九	二六・二七九	一六七・四九九	一〇一・五七〇	二一・〇九三	三三・一七七	二八・二一九
一〇	三六	二五	一九	三二	六	九	一〇	一〇	一六	一三	一一	九	一一	一七	二四	一五	二二	一五	一三	一一	一〇	一三	一一
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	二	〇	〇	二
三・四三三	三・七八九	四・五〇八	三・三九三	二・〇三三	一・八六七	二・〇三三	二・四三三	一・七五八	三・七七三	二・九五九	四・九〇六	五・七八	一四・四三三	一・四三三	三・四一四	四・〇八一	九・二一八	一・八五五	二・八八五	八・四六四	二・〇九	二・六二九	二・五五六
五原郡	雲中郡	定襄郡	鴈門郡	代郡	上谷郡	漁陽郡	遼西郡	右北平郡	遼東郡	玄菟郡	樂浪郡	南海郡	鬱林郡	蒼梧郡	交趾郡	合浦郡	九真郡	日南郡	趙國	廣平國	眞定國	中山國	信都國
三九・三三三	三八・三〇三	三八・五五九	七三・一三八	五六・七七七	三六・〇〇八	六八・八〇三	七・六五四	六六・六八九	五五・九七一	四四・〇〇六	六二・八二二	一九・六二三	二・四一五	二・四三九	九・四四〇	一五・三六八	三三・七四三	一五・四六〇	八四・三三	二七・九四四	五七・二二六	一六・八七三	六五・五五六
一六	一一	二二	二四	一八	一五	二二	一四	一六	一八	三	二五	六	一一	一〇	五	五	七	五	四	一六	四	一四	一七
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	二	〇	〇	五
二・四八八	三・四八三	三・二二三	五・二三四	三・一五四	二・四〇一	五・七三四	五・一九〇	四・六八八	三・一一〇	一・五〇一	二・八三三	三・二六九	一・〇三三	二・四八	九・二四四	三・〇六〇	五・一〇六	三・〇九二	二・〇八一	一・七四九	九・二八二	一・四二〇	三・八五六

河間國	四三・四三	四	〇	一一・二六
廣陽國	二〇・七四〇	四	〇	五・一八五
甾川國	五〇・二八九	三	〇	一六・七六三
膠東國	七二・〇〇二	八	〇	九・〇〇〇
高密國	四〇・五三二	五	〇	八・一〇六
城陽國	五六・六四二	四	〇	一四・一六一
淮陽國	一三五・五四四	九	〇	一五・〇六〇
梁國	五八・七〇九	八	〇	四・八三九
東平國	一三・七五三	七	〇	一八・八三三
魯國	一一八・〇四五	六	〇	一九・六七六
楚國	一二四・七三八	七	〇	一七・八二〇
泗水國	二五・〇二五	三	〇	八・三四三
廣陵國	三六・七二三	四	〇	九・一九三
六安國	三八・四四五	五	〇	七・六六九
長沙國	四三・四七〇	一	〇	三・三四四

⑮「曲逆」は文選の陸士衡の高祖功臣頌の注によれば「曲句區反。逆音遇。」とあり、「くぐう」と讀むべきことがわかる。

⑯列侯に「別邑」を持つものがある。漢書の卷五十九の張延壽傳に「延壽已歷位九卿。既嗣侯。國在陳留。別邑在魏郡。」とあるのがそれである。この別邑の解釋には種々問題があろうが、益封の場合に、その縣の戸數が足りなくなり、別邑が發生したと

考えたら如何であらうか。

⑰「魏晉南北朝租稅の研究」十七頁參照。

⑱「唐代の封爵及食封制」(東方學報東京第十冊之一、昭和十四年十月)

⑳小林昇氏「兩漢を通じて見たる列侯と其の封邑との關係」(東洋史會紀要第四冊、昭和十九年十月發行)一二二頁參照。

㉑注④參照。

㉒「金印紫綬」については栗原朋信氏の「漢の印制よりみたる漢委奴國王」印について(史觀第四十二冊)八列侯の印、參照。

㉓門大夫についてはたゞ漢書卷十六高惠高后文功臣表の留文成侯張良の條に、「高后三年侯不疑嗣。十年。孝文五年。坐與門大夫殺故楚內史。贖爲城旦。」という記事がある。

㉔西漢會要卷三十一丞相の條に、「集曹掾、奏曹、主簿、從史」をいすれも丞相府の下級官吏の如く解しているが、勞榘は居延漢簡考釋考證卷一において、隸釋卷五の「巴郡太守張納碑」を引いて、それらが、郡の下級官吏であることを證しているが、從うべきである。

㉕錢穆氏「漢初侯邑分布」(齊魯學報、第一期、民國三十年一月)五井直弘氏の前掲論文。

㉖前漢の諸侯王に關する二三の考察(西京大學學術報告、人文、第三號、昭和二十八年三月)

## On the Hou-kuo (封國) of the Former Han

*Chōfū Nunome*

The lieh-hou (列侯), which was a kind of feudal lord under the Han dynasty was enfeoffed to the hsien (縣), and such a hsien was called hou-kuo. But the number of the households of the lieh-hou disagrees with that of the hsien's households, indicating that the lieh-hou was enfeoffed as lord of part of the hsien. Such was the rule in the Former Han period, but at the end of the period this rule was loosed, and the lieh-hou became to be enfeoffed as lord of the entire hsien as we find in the Biography of K'uang Ch'êng (匡衡) who had the whole Lo-an (樂安) hsien as his feof. Unless we take it into consideration that the lieh-hou's feof was not same with the hsien, we cannot grasp the difference of function between the hsiang (相) and the chia-ch'êng (家丞). The hsiang of a lieh-hou was, in fact, ling-ch'ang of an ordinary hsien, the only difference being that he was obliged to send in a certain amount of taxes collected in his hsien to the lieh-hou. It seems that the lieh-hou as a feudal lord had only limited power over his feof, though sometimes he wielded his power unlawfully in extorting the peasants.